

第9回「泉大津市オリウム随筆賞」

【優秀賞】

白いタオル

久多里スマ子・大阪府富田林市

「危ない、座りなさい。」

私の怒鳴り声が聞こえないかのように少年は周りの机の上を渡り歩いた。引きずり下ろそうとすると、教室から飛び出し、しばらく帰ってこなかった。運動場を走り回り遊具で遊び、汗だくで帰ってきた。怒るとまた飛び出して行く。白いタオルを差し出すと「汚れるで」「いいよ。持っていないでしょ。」「家に白いタオルないもん。」「こんなやりとりの後、やっと椅子に座った。以後毎日白いタオルを用意した。白いタオルが彼と私を結びつけ、信頼関係の糸口になった。教師生活初め頃の経験である。

私は彼との出会いで教師としての姿勢を身につけたように思っている。自分の思い通りに運ぼうとすると、相手もまた腹をたてる。常に真心を込めて接し、自分が腹をたてない方法を考えるようになった。

彼は三年生になって転校してきた。いつも飛び回っているわけではない。本の読み聞かせなどは、のめり込んで聞いているしキラキラした目で授業に参加している時もある。しかし、書くことは一切しない。作文用紙を渡そうとしても受け取るうともしないのだ。理由を聞いても「おもしろくない。」と言うだけだった。ひとときも彼のことから離れなかった。家庭訪問を何度もしたが、一人親の父に会えなかった。一間に布団が敷きっぱなしで勉強するスペースなどなかった。

白いタオルのおかげで、少しずつ話せるようになった。「先生、タオル。」「いつもの場所よ。早く帰ってくれて嬉しいわ。」

ある時私ははっと気づいた。みんなが静かに書き出すとじやまをする。もしかして、字を知らないのではないか。私は彼にプリントを渡しながら、「書かなくていいから、自分の名前だけ書いて。」「名前だけでいい?」と名前を書いた。驚いたことに自分の名前も鏡文字になっていた。残して教えようとしたが帰ってしまう。彼にどうしたら教えることができるのか考えあぐねていた。

宿題を忘れる子を残して学校でさせることにした。ところが他の子も残りたいと言い出し、みんな残ることになった。「さよなら。」と言って教室から出る。そして「ただいま。」と入ってくる。私はお母さんになって「お帰り、遊ぶ前に宿題しなさいよ。できたらみんなで遊ぼう。」と言った。みんなのおかげで彼も残って勉強した。できる限りおもしろく文字を教え、できたら褒めていると、興味を持ち始めあつという間に平仮名もカタカナまでも覚えてしまった。みんなは「お前、頭いいな。出来る子や。」と褒めていた。勉強した後

一緒に汗だくだくになるまで遊んだ。数枚の白いタオルをみんなで使った。彼は次第に机の上を飛び回らなくなっていき、私は何とも言えない充実感を味わった。一人ひとりを大事に見る大切さと集団の力の大切さを学んだ。

遠足のお知らせをしていた時

「僕行けへんで。今まで行ったことない。」

「行きたくないの？」

「行きたくてもお父さんが行かせてくれん。」と言う。彼は一年生から一度も遠足に行ったことがなかったそうだ。私はさっそく家庭訪問をし、父が帰るのを待ち、彼を遠足に行かせて欲しいと頼んだ。「こいつが行きたくないと言うからしかたないやろ。」と言われた。私には行きたいと言っていた彼はお父さんの前では行きたくないと言った。夜中まで頼み込んだが、「リュックもないし、弁当もつくれん。行かせんといったら行かせんのや。」と追い出されてしまった。やっと間に合った終電の中でどっと疲れが出て、気分も身体もひしゃげて何も目に入らなかった。

私は次の日だめもとでお弁当と白いタオルを持って行った。クラスの子が私を見るや否ややうれしそうに走ってきて、彼が来ているという。リュックではなく布袋にパンを入れて来ていた。私は思わず大きな声で「みんなで行ける遠足、最高。」と言うとみんなも「最高、最高。」と嬉しそうに繰り返した。最高の遠足だった。私達を祝福するように、気持ちのいい青空だった。帰りに乗った電車の中は明るく隣の見知らぬ人に話しかけてしまった。遠足の疲れは一切感じず、汚れた白いタオルがいとおいしく首に巻いて帰った。

二十年過ぎたある日、彼からは是非会いたいと一通の手紙が届いた。中華料理屋で、てきぱき指示をする彼を見て、胸が熱くなった。彼は私を見るや否や「先生ありがとうございます。」と駆け寄ってきた。「立派になったね。見違えたわ。」「先生の写真と白いタオルいつも持っています。」遠足の時の写真を見せ、「つらい時、先生の笑い顔見るとやる気が出てくるんです。」うれしくて涙が出てきた。「私も悩んだ時、白いタオル見てあの頃のこと思い出すと、元氣出るのよ。」と言って別れた。心晴々乗った電車は彼が初めて遠足に参加した帰りの電車のように明るく感じた。